

# 大津 歴博 だより

開館20周年記念企画展

## 柴田晩葉

—湖都のモダン日本画家—

平成23年3月5日(土)～4月17日(日)

2011  
No.82



落葉掃き 大正 大津・個人蔵



京の町(部分) 大正 大津・個人蔵



大津市歴史博物館

## 開館二十周年記念企画展

# 柴田晩葉ばんよう — 湖都のモダン日本画家 —

平成二十三年三月五日(土)～四月十七日(日)

明治京都画壇を竹内栖鳳と二分した山元春挙、院展の大御所として、つい近年まで活躍していた小倉遊亀、文展で活躍した後、結成に参加した日本自由画壇で独自の活動をした渡辺公観など、湖都・大津が育んだ日本画家は少なくありません。また、戦前までの大津は、春挙門下の画家たちや渡辺公観らを、江戸時代以来の富商や数奇者、花街の料理屋などが後援者として、作品の揮毫を依頼し、支えていました。

本展で取り上げる、柴田晩葉もその一人です。晩葉は、同時代の大津出身の日本画家と比較して、高等美術教育機関を修了して、画壇にデビューした日本画家です。その点で、晩葉の作品には、大正時代の最先端の美術モードの影響が反映されています。しかし、同時に、牧歌的な诗情にあふれた作品を、自然体で制作している点は、大津出身・湖国出身の人物ならではの、特異な魅力といえます。

それにもかかわらず、現在の晩葉の知名度は意外なほど低いといえます。戦前は、文展・帝展で受賞を重ね、晩葉本人の手紙にもあるように、「凱旋将軍に対する如き賛辞」を大津の人々から受けて、晩葉本人がとまどっていたほどであったのですが、終戦を待たずに還暦前の年齢で逝去してしまい、戦後の日展で活躍することはありませんでした。ゆえに、忘れ去られてしまったというのが実情なのでしょう。

したがって、晩葉の展覧会も、過去に滋賀県立琵琶湖文化館で小規模に開催

された程度であり、作品の発掘もまだまだこれからの段階です。

幸い、本展の事前調査によって、戦前に結成された、晩葉の作画活動に共鳴する大津の有志の後援組織・十葉会の存在が明らかになり、その会員の遺族宅を中心に、魅力を放つ作品をいくつも確認することができました。これを機会に、ユニークな表現を貫いた大津の日本画家の仕事にスポットを当て、まとまった形で紹介するものです。

主 催…大津市・大津市教育委員会・大津市歴史博物館・京都新聞社

後 援…NHK大津放送局・BBCびわ湖放送・エフエム滋賀

観覧料…一般 八〇〇円(六四〇円) 高大生四〇〇円(三二〇円)

小中生 無料

※(一)内は前売・団体(十五名以上)、大津市内在住の六五歳以上の方・障害者の方の割引料金

休館日…月曜(三月二十一日は開館)、三月二十二日(火)

### 《晩葉展》のツボ

晩葉展は、左記の展示コーナーで構成されます。まるで現代の日本人のイラスト作品を見るかのような、モダンな人物表現や、メルヘンチックな情景の作品が揃っていたかと思うと、一方で、日本の四季や風物、農村風景なども、情緒豊かに描いています。さらに、実験的な水墨技法を駆使した大作もあり、晩葉ワールドは、実に多彩な日本画の側面を、我々に見せてくれ、楽しませてくれます。かつての大津の人々が愛した、晩葉ワールドは、全く色褪せていません。どうぞ、お気軽にお楽しみ下さい。

○大正の幕開けと晩葉 ○十葉会 — 晩葉のサポーターたち —

○禅刹障壁画への挑戦 — 青龍寺の襖絵群 — ○昭和の晩葉 — 大津への回帰 —

○モダンな軽味 — 晩葉の俳画 — ○師・山元春挙、そして門人の異色作品たち



雲竜図 (叶形) 大正14年 (1925) 大津・青龍寺蔵



帰帆 昭和 大津・個人蔵



時雨傘 昭和 大津・個人蔵



巡礼者御一行 大正 京都・個人蔵

## 第八十八回ミニ企画展 大津の遺跡シリーズ9

### 近江国庁と周辺遺跡

平成二十三年一月十八日(火)～三月六日(日)

奈良時代、瀬田川東岸の瀬田地域には、古代近江の行政を統括する国府が置られました。国府の中心となる行政施設が国庁で、その周辺に国庁と関連する役所や役人の住居、官営工房などが計画的に配置されて、国府域を形成していたと考えられます。

国庁のなかで、国司が政務を執る所を政庁と呼び、この政庁の遺構が昭和三十八年度の発掘調査で発見されました。政庁は、築地塀に囲まれた空間に、瓦積基壇の上に建てられた四棟の瓦葺建物が配置されています。国庁跡出土遺物の中で特徴的なものは、流れる雲をデザインした飛雲文(あるいは流雲文ともいう)を配した軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦です。この飛雲文瓦は八世紀後半のものともみられ、国庁以外に国庁関連遺跡などから出土しています。

今回のミニ企画展では、国庁跡をはじめ、国庁関連遺跡である惣山遺跡・青江遺跡・堂ノ上遺跡・中路遺跡・瀬田廃寺などの最新の調査成果を紹介します。



惣山遺跡付近の上空から近江国庁跡を望む

## 第八十九回ミニ企画展 大津の仏教文化11

### 三井寺の仏画

平成二十三年三月八日(火)～四月二十四日(日)

天台寺門宗総本山の園城寺(三井寺)は、大津に都があった七世紀中頃には創建されたと考えられている、現存する大津最古の寺院の一つです。後の平安時代(九世紀)に、比叡山延暦寺の第五代天台座主、円珍(智証大師)が入寺したことにより天台別院になりました。朝廷の帰依が篤く、わが国有数の寺院として隆盛を誇っていたこともあり、当時一流の宝物が造られました。現在でも国宝や重要文化財をはじめとした大変多くの寺宝を所蔵することでよく知られています。この秋の「大津 国宝への旅」で展示した国宝の黄不動尊や、同じく国宝の五部心観などの素晴らしい秘宝は、ご記憶に新しいことかと思えます。

今回は、今までほとんど紹介されることの無かった、未指定の中世仏画を中心に展示します。円珍像や新羅明神像といった本寺独特のものから、両界曼荼羅などの天台密教に関するもの、さらには、近年の修復まで使用されていた国宝黄不動尊の旧表具や、国宝五部心観の江戸時代の忠実な模写、法明院本五部心観など、普段は全く目に触れることのできない貴重な宝物も展示予定です。本展により、三井寺の懐の深さを感じていただけたら幸いです。



絹本着色両界曼荼羅図のうち、「金剛界」

## 写真展に寄せられた思い出

十一月二十三日まで開催した「大津百町大写真展」は、期間中多くの方々にお越しいただきました。本展は、館外の方々と共同で行なった結果、古い写真だけでなく、現在の大津の様子を写真に捉えるなど、博物館だけでは出来ない、バリエーション豊かな写真を多く展示することが出来ました。

今回はその中から、旧大津公会堂で行なった「大津百町思い出写真館」をご紹介しますと思います。旧大津公会堂では、写真家の谷本勇氏が撮影された昭和三十、四十年代の写真、約百五十点を展示した写真展です。会場は、お越しいただいた方がメモとペンを持ち、写真から思い出された記憶を自由にお書きいただいて、写真の周囲に貼り付けることで、それぞれの思い出をみんなで共有する仕掛けを考えました。最終日には、写真の周囲はメモがいっぱいに飾り付けられて壮観でした。

展示作品は、当時の街並みの様子や当時の家庭での生活など、いくつかのテーマに分けて展示しましたが、特に思い出が多かったのは、観光船「玻璃丸（はり丸）」や、長等商店街にあった映画館「大黒座（大黒映劇）」といった、レジャーに関わる写真でした。思い出は、家族で船に乗ったことや、ご覧に



なられた映画の題名など、様々でしたが、やはり娯楽に関わる思い出は、いつまでも記憶に残るようです。

また、当時の生活に関する思い出も多くみられました。谷本氏の撮影された、ゴミ出しなどの日常の生活に関わる写真や、洗濯機など当時家庭



電気洗濯機

昭和35年8月 谷本勇氏撮影

にやってきた電化製品の写真、誕生日の食卓の様子などは、当時の生活を思い出された方々や、当時は生まれていない子どもたちからも、多くの感想をいただきました。

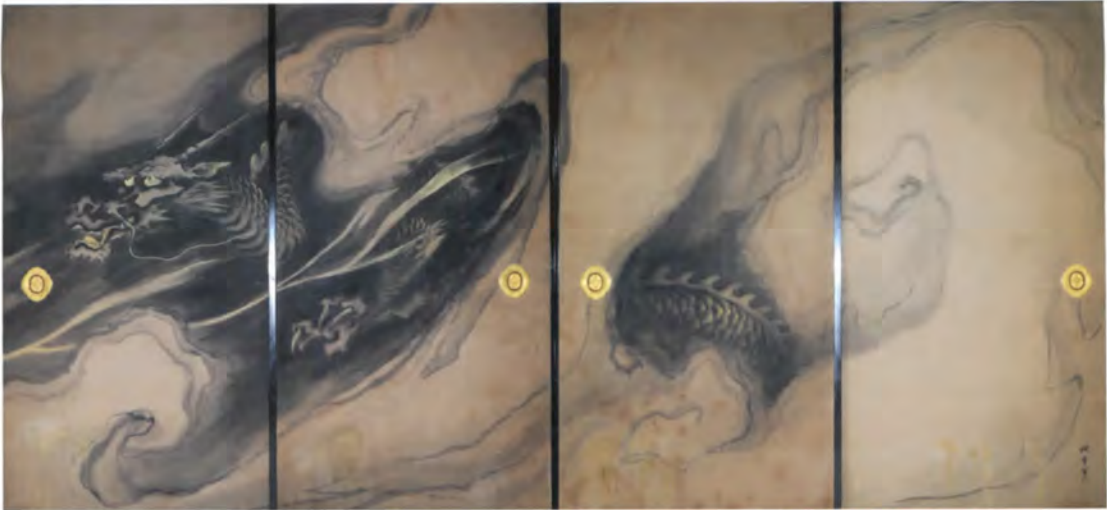
深かったのは、島ノ関の踏切を横切る荷車の写真に関する思い出です。荷車に積まれているのは、大津百町で回収された「し尿」で、町で排泄されたし尿は、周辺の農村の人々によって回収され、湖岸から船に乗せられて、肥料として利用されていたそうです。この写真をご覧になられた方からは、「家の肥溜めが満杯になると、汲み取りに来られるのを待ちかねた」とか、「下肥と引き換えに、夏は西瓜や野菜、暮れには、もち米や小豆をいただきました」など、写真だけではわからない当時の状況をうかがえる様々な思い出を寄せていただきました。

これら、みなさんの思い出を拝見して、写真が持つ思い出を引き出す力に驚くとともに、写真から湧き出る皆さんの思い出を一緒に記録しておく事の大切さを再認識する結果となりました。これらの感想については、大切に保存し、後日どこかでご報告したいと考えています。

（木津 勝）

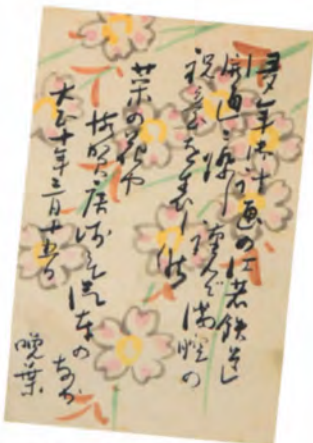


肥桶を積む荷車 昭和35年2月 谷本勇氏撮影

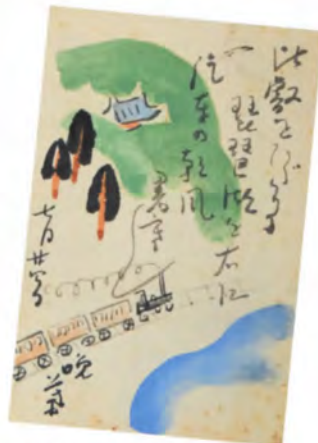


雲竜図(阿形) 大正14年(1925) 大津・青龍寺蔵

宇治の茶摘  
昭和初期  
大津・個人蔵



江若鉄道開通祝賀俳句絵葉書  
大正10年 大津・個人蔵



暑中見舞 江若鉄道車中より  
大正10年 大津・個人蔵



暑中見舞 日吉三橋より  
大正10年 大津・個人蔵

大津歴博だより No.82  
平成22年12月28日

大津市歴史博物館  
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077) 521-2100  
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>